

JOI(ジョイ)プログラムとは

日米草の根交流コーディネーター派遣(英名 Japan Outreach Initiative: JOI)プログラムは、米国の草の根レベルで日本への関心と理解を深めることを目的に、地域に根ざした交流を進めるためのコーディネーターを2年間派遣する事業です。活動を通して日本の草の根交流の担い手を育成するのも本プログラムのねらいです。コーディネーターは、日本との交流の機会が比較的に少ない米国の南部・中西部・山岳部の大学や日米協会をはじめとする地域交流活動の拠点に派遣され、その地域の小学校から大学までの教育機関、図書館、コミュニティセンターなどを訪れ、日本人の生活ぶりや、伝統芸能、日本語など、日本の幅広い文化を紹介する活動を行います。



JOIプログラムは、国際交流基金と米国の非営利団体ローラシアン協会が2002年より共同で実施しています。



JAPAN FOUNDATION
国際交流基金

国際交流基金

The Japan Foundation

国際交流基金は、総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関です。1972年に外務省所管の特殊法人として設立され、2003年に独立行政法人となりました。日本の友人をふやし、世界との絆をはぐくむため、「文化」と「言語」と「対話」を通じて日本と世界をつなぐ場をつくり、人々の間に共感や信頼、好意を育んでいきます。



ローラシアン協会

Laurasian Institution

「異なる文化を背景とする人々が協力し、意義ある国際交流環境を創造していく」ことを基本理念に、1990年に米国イリノイ州で非営利法人として設立されました。国際教育・異文化交流教育に主眼を置いたプログラムの企画・運営を行い、主にアジア・アメリカ・ヨーロッパ大陸間で文化理解を深めるための教育プログラムや情報提供に関わる事業を展開しています。

お問い合わせ

〒153-0064 東京都目黒区下目黒5-5-17
Tel: (03) 3712-6176 / Fax: (03) 3712-8975
Email: joi@laurasian.org
<https://www.laurasian.org/joi>

詳細はこちら ▶

<https://www.jpff.go.jp/j/project/intel/exchange/joi/index.html>



2024 JOI Program Yr. 20th Report

Japan Outreach Initiative

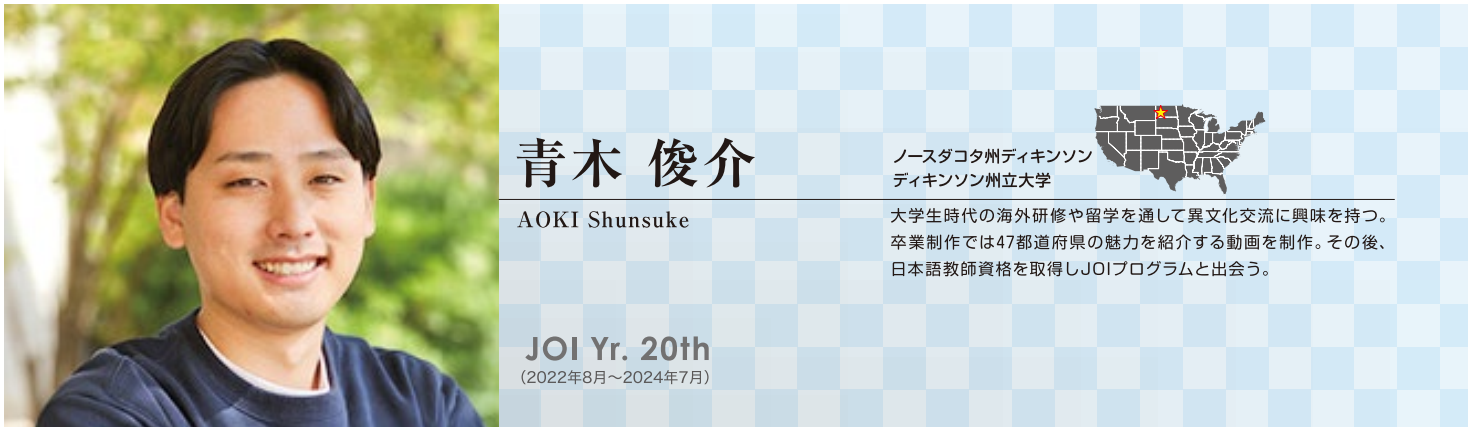
JOIプログラム 20期コーディネーター活動報告

2年間の任期を終えた第20期(2022年8月~2024年7月)のコーディネーターから、それぞれの活動体験談を寄せていただきました。第1~19期の報告やプログラムの詳細はウェブサイトをご覧ください。 [JOIプログラム](#) [検索](#)



ふれる。つながる。世界が広がる。

JOI PROGRAM
日米草の根交流コーディネーター派遣プログラム



ノースダコタでの活動を終えて

渡米後、デンバーでの着後研修を終え30人乗りほどの小型飛行機に乗り降り立ったのは小さな平屋の空港でした。今日から新生活が始まるというワクワク感とともに飛行機と空港のサイズから派遣先の小ささを察し不安を感じたのを今でも覚えています。

私はノースダコタ州 (ND) にあるディキンソン州立大学の国際課に派遣されていました。学生数は約1,400人と小規模な四年制大学です。全50州の中でもND在住日本人は少なく、日本との関係も薄い中、派遣当初は手探り状態が数か月続き、順風満帆なものではありませんでした。日々の活動としては、大学内での日本語クラスや書道など日本文化イベントの実施、そして地域の公共図書館や小学校・中学校などにも訪問しプレゼンテーションやアクティビティを実施しました。活動に取り組む中で、訪問した図書館の司書さんから学校の先生を紹介していただいたり、ローカル新聞で私の活動を取り上げていただくなど地域の方からのサポートのおかげで活動範囲が広がり、ノースダコタ各地に行くことができました。

2年間アメリカで生活する中で、アメリカの文化に触れることができるのもJOIの醍醐味だと思います。私は友人からカウボーイ・カウガール文化を学び、ロデオの大会を見にいく機会もありました。またネイティブアメリカンの方が多く住む地域でアクティビティをした際、彼らの文化・歴史について触れることができたのも貴重な経験です。私の出身地、北海道の先住民族アイヌ民族について紹介した際には、日本に先住民族がいることに驚き、興味深く話を聞いてくれたのが印象的です。



農学部生向け日本研修の企画・実施

活動の集大成として10日間の日本研修を実施しました。はじまりは私が派遣されてから数か月経ったある日、ホストサイトの農業クラブの

ミーティングに招待されたことでした。そこで、クラブの研修として日本に行き日本の農業について学びたいという話を聞き、私自身、研修旅行を企画した経験がなく不安でしたが、学生の希望を叶えてあげたいと思い、プロジェクトが始動しました。研修実現に向け、学生や教員からのニーズの聞き取り、私たちを受け入れていただける大学探し、資金調達、日程調整、ホテル・航空券の確保などを日頃のアウトリーチ活動の合間に地道に進めました。学生や農学部

の先生はファンドレイジング (募金活動) に取り組み、大学からも大学公認の研修として認めていただき最終的に十分な資金を確保することができました。

今回、ありがたいことに茨城大学に受け入れていただきました。茨城大学にお声がけしたきっかけの一つとして、2022年のノースダコタ州知事一行の茨城県訪問があります。ノースダコタ州と茨城県の関係が新たに構築されようとしている中で教育においてもコラボレーションを実現できればと思い、茨城大学の先生に連絡をしました。3日間の茨城大学での研修では茨大教員による特別講義、施設・農場見学を通して最新の研究や日本農業の現場について学びを深め、有意義な時間となりました。また、学生交流の時間には学生生活の違いやお互いの趣味などについて楽しく話していたのが印象的です。



その後、東京、大阪、京都を観光し、日本の文化・食・自然も存分に楽しみ、東京では米国農務省職員との面談、京都では和牛のと畜場見学を通して、さらに日本の農業について学びを深めました。参加した学生からは「俊介がいなかったら実現しなかった」「次は家族と一緒にまた日本に来たい」と言われうれしく思うとともに達成感を感じました。また、今後も2大学間の交流が続くことを祈っています。



グランドフォークス日本祭り

もう一つの印象に残るイベントは、2024年7月に開催した「グランドフォークス日本祭り」です。この祭りは、グランドフォークス市と栃木県鹿沼市の友好都市認知向上を目的に19期JOIコーディネーター波多野愛子さんが2023年に第1回を企画しました。そして翌年、波多野さんの意思を受け継ぎ、サポートメンバーとして第2回を開催できたのはとてもうれしかったです。お祭りはファーマーズマーケットの一部を借りて実施し、ヨーヨー釣りや書道、折り紙などのブースには多くの人が立ち寄り、日本文化を体験しました。また今回、国際交流基金から助成金をいただき、カナダから和太鼓グループ「吹雪太鼓」に来てもらいました。吹雪太鼓の和太鼓の音色・迫力は観客を魅了し、お祭りは大成功に終わりました。第1回と同様、多くの地域の方にボランティアとして参加していただき第2回を実施することができました。



2年間を振り返り、同僚、地域の方、友人などさまざまな方からの協力により活動に取り組むことができました。アメリカでの楽しかったことや辛かったこと、あらゆる経験を今後の人生の糧にしていきます。



2年間の活動を終えて

ワイオミング州は全米で最も人口が少なく知名度はあまり高くありませんが、石炭などの天然資源が豊富で、世界初の国立公園「イエローストーン国立公園」をはじめ、手つかずの美しい自然が多く残っているのが魅力的な州です。ララミーの街は州で4番目の人口で標高は約2,200m、年中風が強く乾燥し、冬の寒さはかなり厳しく基本氷点下です。この街に州で唯一の四年制大学、ワイオミング大学があり、私はGlobal Engagement Officeに所属していました。

私はJOIで初めてワイオミング州に派遣をされたこともあり、ララミーに留まらず、とにかく多くの町に行きコネクションやアウトリーチ先などを発掘することを活動の主な軸としていました。州内を訪ね回ったことにより、さまざまな場所で自分の存在を知ってもらえ、次のアウトリーチへとつながることができました。

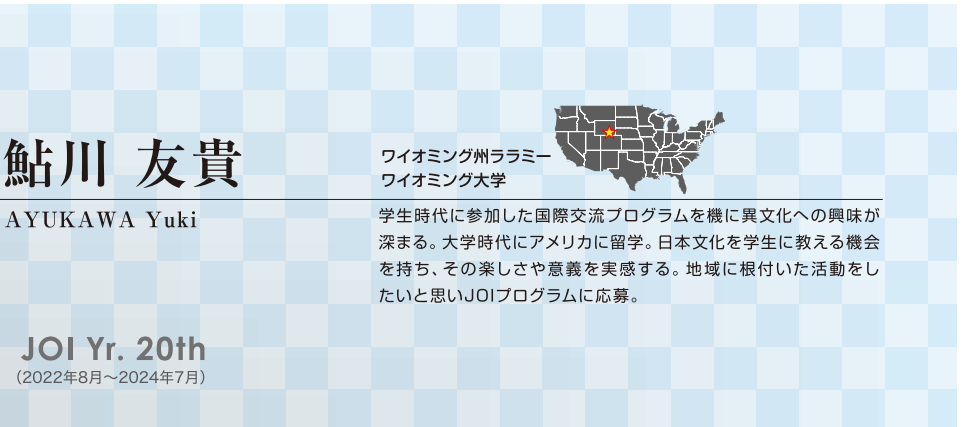
内容としてはいろいろな視点から日本のことを知ってもらいたいと思い、習字や折り紙などの文化、東京から専門の教授にオンラインで参加していただき3.11への追悼も合わせた地震セミナー、ビジネス、歴史、料理など幅広い分野のイベントを行い、セミナーに関しては州内外どの町の方にも参加していただけるようにハイブリッドで行いました。地元のNPO団体とコラボをさせていただいたり、ワイオミング大学の学生に日本まで同行することもありました。

多くの活動の中で特に印象に残っているものを紹介します。

在デンバー日本国総領事・JETROと共催した日ワイオミングビジネスフォーラム

総領事からお声がけをいただき、ワイオミング初のグラスルーツ事業である日ワイオミングのビジネスフォーラムを開催しました。州内にある日本企業が少ないためスピーカーなどを探すのに苦労しましたが、ありがたいことにJETROにご協力をいただけることとなり、ワイオミング州と日本の経済的なつながりの現状、将来的な経済協力の可能性がある分野、今後のさらなる発展の機会について各分野のスペシャリスト、州政府の方々と検討する機会とすることができました。

このフォーラムを通じて、主に総領事館とワイオミング大学とのつながりを作ることができ、ビジネス面でもフォーラム後、実際にワイオミング州の企業から日本企業とのつながり作り



に関心があるとご連絡をいただけ、日本に目をむける今後のきっかけの一つになったのではと思います。

JASWY (ワイオミング日米協会) の復活

パンデミックなどにより機能していなかった現地の日米協会は、私の派遣をきっかけに再立ち上げとなりました。日米協会といっても専任スタッフはおらず数少ない地元メンバーによるボランティアでの活動となりますが、国際交流基金の助成金、地元企業の寄付など多くのサポートをいただき、日本祭りを二つ、そして今後もララミーにてこのような日本文化を紹介する活動を継続していくため、資金集めの日本酒試飲イベントを開催しました。イベントには総領事館にもお声がけをさせていただき、大学関係者ならびにJASWY関係者との関係構築にもつなげることができました。また現在のメンバーで初めてこういったイベントを開催しノウハウや反省点などを共に学ぶことができたので、今後も日米協会イベントを続けるお手伝いができたのではと思います。

ハートマウンテンセミナー

第二次世界大戦中に、日系アメリカ人が強制収容されていたキャンプがワイオミング北部ハートマウンテン側にあり、この負の歴史を多くの人に知ってもらうべく、元収容者の方をカリフォルニアからお招きしてセミナーを行いました。開催にあたり、Heart Mountain Interpretive Centerを訪れ歴史や財団の活動について学ばせていただき、財団のイベン

トのお手伝いも微力ながらさせていただきました。また、大学他部署や他団体に開催への資金協力を行い、平日の午前中であったにもかかわらず、当日は小学校の数クラスが参加するなど多くの方に参加していただくことができました。資金集めやこのテーマに関する関心の多さなど印象にとて残る有意義なセミナーでした。



2年間を振り返ると本当にさまざまなことに挑戦をしたなと感じます。特にワイオミング州は事前情報が少なく、コネクションもないことから本当にゼロからの活動となり大変なことも多々ありました。しかし多くの方のサポートをいただきやり遂げることができた今はどれも良い経験となり、達成感でいっぱいです。今後は日本だけでなくワイオミングの魅力も多くの方に知っていただけるよう、何らかの形で貢献していけたらと思います。最後になりましたが、この2年間サポートしていただいたJOIプログラムスタッフの皆様、ホストサイトの皆様、ご支援していただいたすべての方々に多大なる感謝を申し上げます。





梅原 瑞喜

UMEBARA Mizuki

JOI Yr. 20th
(2022年8月～2024年7月)

ミシシッピ州クリーブランド
デルタ州立大学

高知県出身。20代は海外と日本を行き来して過ごす。日本では地域おこし協力隊や公益財団法人の職員、日本語教師、塾講師など、さまざまな職場を経験。「異なる価値観を知ることで人生は豊かになる」が行動の原動力。

ミシシッピで過ごした2年間

派遣前は...

ミシシッピといえばミシシッピ川と...ワニ?アメリカといえば大国で、いろいろなものが大きくて、ハリウッド映画が作られていて...?これが渡米前の私のアメリカとミシシッピ州に対するイメージです。アメリカにこれまで行ったことのなかった私にとって、その国はテレビや映画で得た情報ばかりのぼんやりとした存在でした。実際にミシシッピに住み、現地の人と関わる濃密な2年間を過ごした今、そのイメージは大きく変わっています。

ミシシッピの歴史を知る

私の派遣されたデルタ州立大学はミシシッピ州のクリーブランドという小さな町の中にあります。周辺は綿花やトウモロコシ、大豆などの畑が一面に広がっており、道行く人は目が合えば手を振ってあいさつをしてくれる、そんなゆったりとしてフレンドリーな土地柄です。しかし、同時にここには悲しい歴史があることを到着してすぐに学びました。かつてこのアメリカ南部の土地には多くの黒人奴隷がアフリカから連れてこられ、農場で強制労働をさせられていた時代があります。綿花はその代表作物でした。奴隷制度が廃止された後も、多くの黒人は社会全体による厳しい差別や偏見にさらされ、経済状況や社会的地位に多くの困難を抱えることになります。ミシシッピは現在でも首都を除きアフリカ系アメリカ人の比率が全米で最も高い場所となっており、歴史が今に色濃くつながる場所です。大学で、博物館で、アウトリーチ先で、そして友人から、そうしたアメリカの歴史と現状を知る機会も多く、ここに来たからこそ学べることが多くあります。また、地域を知っていく中で、経済的制約や家庭環境の影響で州外へ旅行したことがない人も多いことを知り、草の根の交流を担うJOIコーディネーターとして派遣された意義を強く感じました。

アフタースクールプログラム

アウトリーチの中で特に印象に残っているものの一つに、とあるアフタースクールプログラムでの活動があります。2年間を通し季節ごとにお声がけをいただき、小学生から高校生まで多くのメンバーと書道、巻きずし、餃子づくり、折り紙、武道体験などいろいろな内容のアクティビティをしました。ジャパニウィークと題して3日間のワークショップをすることが多く、「ミズ



餃子づくりでは栄養バランスについての話も

キ、明日は何をするの?」「前に作った折り紙までもっているよ!」など長く関わったからこそもらえるコメントがとてもうれしかったです。内容を考えるときは、伝統文化・食・文字など、テーマを分けて3日間各日のアクティビティを考えたり、印象に残りやすいもの、手元に長く置いてもらえそうなものを選んでいました。子どもたちの喜ぶ顔を想像しながら作るプランはとてもやりがいがありました。



Japan Festivalのボランティアスタッフたちと

Japan Festivalの開催

2年目の10月にはキャンパス内にて5日間の日本祭りを開催しました。文化講演、太鼓パフォーマンス、映画上映、体験コーナーなどさまざまな要素を入れた催しで、開催までにはたくさんの試練がありました。一番大変だったのは資金集めで、複数の補助金を申請したり、日系企業にスポンサーの打診をしたりで日々が過ぎていったのを覚えています。ぎりぎりの状況で助けてくれたのはクリーブランド内の団体と個人の善意でした。このような大規模なイベントを企画するのは初めてで右往左往する中、スーパーバイザーやボランティアスタッフなど、本当に多くの人の支えで数百人規模のお祭りを無事に成功させることができました。「本当に楽しかった、企画してくれてありがとう」と現地の人に言われたとき、私も来てくれたことへの感謝でいっぱいでした。



日本語クラスは計5クラス開講しました

日本語クラス

毎週行っていた活動に、日本語クラスがあります。地域にもオープンなクラスで、さまざまな年代のメンバーがいました。3か月1コースとして、ゼロレベル～初級の文法と日本文化を楽しむ勉強することを目標に作ったクラスです。開講したどのクラスでも、毎週欠かさず来てくれるメンバーがほとんどで、仲の良い和気あいあいとした雰囲気がいいつも教室を満たしていました。「このクラスが1週間の楽しみ」「このためにキャンパスに来ている」というコメントをもらい、カリキュラムを1から作ったり、内容を工夫したり、時間をかけて作った甲斐があったと本当に思います。また「アニメの日本語が前よりわかる」「近々日本へ旅行に行くから使うのが楽しみ」という話を聞くと、私も同じようにワクワクうれしい気分になったものです。



学校訪問にて、興味津々の子どもたち!

第2のホーム

ミシシッピで過ごした毎日は、さまざまな挑戦といろいろな場所への訪問で刺激にあふれていました。それでも一番心に残っているのは、人との出会いです。スーパーバイザー、同僚、友人、アウトリーチで出会った人々...素晴らしい人間関係に恵まれ、生き方のヒントをもらいました。ここで築いた関係をこれからも長く大切に、文化の架け橋となっていきたいです。



川添 愛実

KAWAZOE Manami

JOI Yr. 20th
(2022年8月～2024年7月)

ウェストバージニア州ウェストリパティ
ウェストリパティ大学

大学時代に留学を経験し、卒業後は訪日旅行会社に勤務する。コロナ禍で中々国際的な仕事がなくオンラインで日本語を教えている所、JOIプログラムの存在を知り、現地で日本を広める活動に魅力を感じてこのプログラムに応募。

かけがえのない経験

JOIの任期が終わり帰国した今、この2年間日本文化を通してたくさんの人と出会い、そのサポートに感謝するとともに、JOIに参加していなければ行かなかったであろう土地で生活し活動できたことは本当に貴重な経験だったなと感じています。

私の派遣先はウェストバージニア州の北の方に位置している、人口約1,500人の町ウェストリパティにあるウェストリパティ大学でした。西へ10分行けばオハイオ州、東へ10分行けばペンシルベニア州という少しユニークな場所で、州を越えてアウトリーチへ行くこともよくありました。大学は、生徒数約2,400人の小さい州立大学で、派遣されてすぐの頃はちょうど入学や転入のシーズンだったので、週末含め学内でのイベントがたくさんあり、大学全体がアットホームな雰囲気です。新入生にとっても友達を作りやすい場所だなと感じたのを今でも覚えています。私が働くインターナショナルセンターには当初二人のスタッフがいいて、そのうちの一人が私のスーパーバイザーでした。主な活動内容は、ホストサイトや地域の学校や図書館での日本文化イベント、オンライン日本語レッスン、日本の提携大学探し、日本からの訪問者対応、大学にいる留学生のサポート(空港送迎や入居手伝い)でした。その中でも特に印象に残っている経験を2つ紹介したいと思います。



図書館での浴衣試着ワークショップ

ウェストリパティ小学校でのアウトリーチ

大学から歩いて10分くらいのところにあるスーパーバイザーの子どもたちが通っている小学校があり、大学以外でのアウトリーチはそこが初めてでした。派遣当初はどのように地域の学校にイベントの交渉に行っていかなかったのですが、スーパーバイザーが私のことを校長先生に紹介してくれて、そこから月に1回のアウトリーチ活動が始まりました。普段のアウトリーチ活動は1回きりのことが多いのですが、こ



小学校での書道ワークショップ

の小学校とは大学としてもつながりが濃く、スケジュールも確保していただけたので毎月訪問することができました。はじめの1年は書道や浴衣試着、折り紙などの文化体験で、2年目は冷麺のトッピングを自分でカスタマイズしてもらうワークショップや日本語レッスンなど、体験の幅を広げるようにしました。初めは日本文化のことを何も知らなかった子どもたちも、次に訪問したときに学んだことを覚えてくれていたり、会うたびに「こんにちは」とあいさつしてくれたり、その変化を感じられたことはうれしかったですし、やりがいを感じる瞬間でした。そして何より、この小学校へ訪問する際はほとんどいつもスーパーバイザーがアシスタントとして一緒に来てくれ、イベントが円滑に進むようサポートしてくれたことが2年間通い続けられた理由だと思います。



大学での折り紙ワークショップ

大学での日本文化ギャラリー

大学内のギャラリーを借りて、文化備品の展示を行いました。このアイデアは2年目の秋に同期コーディネーター森さんのホストサイトであるモンタナ州ビルリクスで行われたJOI研修で、森さんが企画していた大学内での日本文化

ギャラリーから着想を得ました。はじめにアートの教授に話を持ち掛け、文化備品を各所からお借りしました。鑑のセットは国際交流基金ニューヨーク日本文化センターからお借りし、試着ワークショップも行い、交流型の展示会となりました。その他も、着物や学校グッズ、人形など日本の品々であふれ、ギャラリー内の音楽も、音楽を教えている教授が日本らしい自然の音を利用したプレイリストを作ってくくださったので、見るだけでなく耳でも楽しめるような場となりました。オープニングの夜には、定番のお菓子だけでなく、抹茶クッキーなど日本の味のお菓子も用意し、音楽の教授と学生による和太鼓のアンサンブル演奏もあり、イベントが盛りだくさんの展示会となりました。いつものイベントやワークショップは日時が固定されているため、一度に多くの人に文化を伝えることは難しかったのですが、この展示会は2週間ほど開催していたので、好きな時に気軽にゆっくり楽しんでもらうことができ、多くの人に日本文化を伝えられました。大学内であまり交流がなかった方々からも、「展示会おもしろかったよ」と声をかけてもらうこともあり、今までつながっていなかった層ともつながることができました。いつものイベント以上に協力していただいた方・機関が多く、一人では絶対に成しえなかったことなので感謝の気持ちでいっぱいです。



展示会の様子

スーパーバイザーをはじめ、2年の間にたくさんの方にお世話になり、ここには書ききれないほどの活動を行うことができました。私が帰国した後も日本映画キャンペーンに参加したりと、スーパーバイザーが積極的に日本文化を広める活動を行ってくださり、JOIの活動を続けてくださっているのには感謝しかありません。この2年間で紡いできた縁を大切に、これからも日本から交流を続けていきたいです。



榎原 ひと美

SAKAKIBARA Hitomi

JOI Yr. 20th
(2022年8月～2024年7月)

テキサス州コーパスクリスティ
テキサス州立アジア文化博物館・テキサスA&M大学

京都府出身。オーストラリア留学後、通訳案内士の資格を取得し、地域に密着したツアーに従事。しかし、新型コロナウイルスの影響があり、来日されるのを待つのではなく、自分から米国に赴き活動するJOIプログラムを知り、応募。

たくさんの方に支えられて

私は、テキサス州の中でも南部にある湾岸都市コーパスクリスティに派遣されました。テキサス州は、日本よりも広大で、私の街からは、車を10時間運転してもまだほかの州にたどり着くことができません。約2時間で国境が越えられるメキシコのほうがよほど近く、スペイン語を母語とする人たちも多いので、メキシコ料理のレストランもたくさんあります。気候は、夏がとても長くて、寒い冬はほとんどありません。デンプーでの研修を終えて、空港から出たときの日差しの強さと熱気はとても印象的で、山に囲まれた京都から、山がない海沿いの街に来て、広大な畑、道沿いに見えるヤシの木とメキシコ湾が新鮮だったことをよく覚えています。

私のホストサイトは2つありました。1つ目は、「Texas State Museum of Asian cultures」です。町のはずれにある小さなミュージアムで、ここが私の主な活動の拠点となりました。アジアと名前はついていますが、もともとは日本に長く滞在し、その文化を学び、美術品を収集したテキサス州出身の女性が約50年前に開館したもので、そのほとんどは日本に関するものです。しかしながら、日本人は長らく居なかったようで、展示には疑問のあるものも多くあるのが現状でした。

もう1つは、テキサスA&M大学の図書館にあるアーカイブ室です。週に1回、ミュージアムにある資料を持ち込んでデジタル化し、ウェブページを作ることが主な仕事内容でした。ミュージアムの開設者であるチャンドラー氏の資料は、どれも大変興味深く、それらをまとめてページを作成することにやりがいを感じていました。

まず取り掛かったのが、ミュージアムを拠点にイベントやワークショップを企画、実施することでした。日系のコミュニティや既存のプログラムはなく、ミュージアム自体の認知度も低かったため、存在を知ってもらうために初めは試行錯誤の連続でした。私が今まで多く接してきたのは、日本に興味があり訪日された方や、日本に来る機会に恵まれた方がほとんどでした。一方、ここでは、まだまだ日本についてあまり知らない人も多く、日本文化の紹介やJOIの活動を通じて何を伝えたいのか、楽しんでもらうためには何を提供するのがいいのか、自問自答しながら活動内容を考えていました。今の



地元の図書館ですしワークショップ

特に反響の大きかったのは食に関するワークショップでした。いちご大福、すし、おにぎり、餃子などを行いました。親子や友達と一緒に楽しむ連帯感、何かを自分で作り上げる達成感、また、新しい人や文化を知るわくわく感などが理由かと思いますが、何よりも、風潮として食べることが好き!といった人が多かったからだと思います。特に餅づくりでは、みんな真っ白になりながら、独創的なかたちのものを作り上げて、毎回笑顔の絶えない楽しい時間となりました。ワークショップとは別に、さくらまつりなどのイベントも行いました。地元の団体のパフォーマンス、バンダーやフードトラックにも声をかけて参加してもらい、現地の人たちも巻き込みながら、参加者同士のつながりを広げて、来場者には一緒に体験できる折り紙などのコーナーも提供して、たくさんの方に来ていただくことができました。これらの活動を通じて、日本のことを少しでも身近に感じてくれたらうれしく思います。



小学校のイベントで折り紙テーブル

これらに前向きに取り組めたのは、参加してくれた皆さんの笑顔と、それを盛り上げてくれたボランティアの存在があったからにほかなりません。さまざまな課題と一緒に向き合い、挑戦し、応援してくれたからこそできたことばかりでした。



日本語テーブル

2年間の活動で、まだまだやり切れていないことも多いのですが、その中でもとても心に残っている活動が2つあります。どちらも、現地の有志によって継続してくれることになったのですが、1つ目は、日本語テーブルです。日本語を学ぶところがないので、オンラインで日本語レッスンを始めたのですが、月に1回はミュージアムに集まって一緒に学ぶ場所を作りました。2つ目は、太鼓チームです。サンアントニオの日米協会の協力を得て、初めは3人から、今は10人以上のチームとなって毎週練習をしています。地元のイベントで披露する機会にも恵まれました。一緒に大きな舞台に立ったこと、一生懸命練習したことは忘れられない思い出です。



アニメイベントで太鼓の演奏

最後にボランティアの皆さん、一緒に日本語を勉強してくれた皆さん、現地の日本食レストランの皆さん、道場の先生方、現地で関わってくれた皆さんには本当に感謝しています。皆さんとの出会いとご縁でネットワークが広がり、2年間で素晴らしい体験をすることができました。今後もこのご縁を大切に、いつか返しができるようにつなげていきたいと思います。



立尾 論世

TACHIO Satoyo

JOI Yr. 20th
(2022年8月～2024年7月)

オハイオ州フィンドレー
フィンドレー大学マッツァ美術館

交換留学先のカナダで多様な人々に出会い、バックグラウンドや習慣を超えて互いに理解し合う楽しさに目覚める。日本語指導や地方都市の活性化などに関わり、文化や言語への理解を草の根交流で深めるべくJOIプログラムに参加。

オハイオで出会う日本

オハイオ州フィンドレー大学内にある絵本の原画を収蔵するマッツァ美術館で、PBS (米国版NHK) 製作のドキュメンタリー『The Magic of Mazza』のタイトル通り、幾度も奇跡に遭遇しました。1982年、大学の100周年を機に小さく産声を上げたこの美術館は、全米及び世界中の絵本やアートを愛する人々を虜にしています。絵本画家や作家、関わる人々の圧倒的な熱量が生む笑顔が、世界的にも類を見ないこの美術館のかけがえのない宝です。

アウトリーチを続けるうち、町の大きさやイベントの規模に関わらず、どんな出会いから芽が出たりご縁がつながっていくかは、やってみなければわからないと強く感じました。出会った人々からの紹介先のほか、別の町にある姉妹都市協会や図書館、美術館や企業などでのイベント出展にワークショップ開催と、地道なアタックを続け、活動範囲を開拓してきました。

それぞれの場所に多様な関心を持つ方々がおられることに、いつも新鮮な喜びを覚えます。精力的に活動するグループの皆さんから多大なパワーを受け取ります。関わってくださる方々、イベント会場で出会ってくれた方々、オンラインや対面でオハイオでの活動に興味を持ってくださった方々のおかげで、次なる場所やテーマにチャレンジする機会を頂き、日本にまつわる交流の場を広げることができました。まずは自分から動くことの大切さを実感しています。



刺し子体験 手芸は世界共通の言語

未知のものやおいしいものに出会った時の反応は世界共通です。驚きや喜びの感情は心のどこかに記憶として残ります。各地で折り紙が好きだと話してくれる老若男女に出会いました。紙1枚で表現できる世界に魅せられている人が大勢いることに改めて驚きます。風呂敷結びやお抹茶点ては、強く印象に残る機会であったようでした。イベントごとにはさまざまな年齢の方たちとの出会いがあり、会の終了後には友達ともやってみるねという声を頂きます。



折り紙体験 目鼻を描き入れるといるるなマウスができました

お習字や筆への興味は特に大きく、どの参加者の方からも文字や絵をかく喜びが伝わってきました。後日届いたお便りに、日本語でのサインが添えられていて感激することも多々ありました。皆さんの心が動く瞬間に立ち会い、その後の人生にも登場シーンがあるとは望外の喜びでした。まだ日本を訪れたことのない方たちが日本文化を楽しむ様子を見るうち、私も新たな目で日本を見ることができるようになったと感じます。

2年目には参加者の方々とより深くお話しできる場面が増えて、皆さんの日本にまつわる記憶を伺うことや、アメリカ中西部について聞かせてもらうことも多くなりました。「次はいつ会える?」と尋ねられたり、サインを求められたりすることもありうれしかったです。

お抹茶体験

茶筌の形や素材、点て方に興味を持ってくださる方が多かったです。アメリカの方はくっきりと甘いものを好む傾向にあり、こちらで飲まれる抹茶ドリンクもスイーツのような甘さで、苦味は敬遠されると思っていました。ところが、毎回おいしいという声が圧倒的で、飲む前には砂糖を加えたいと仰っていた方も、点てた後にはそのままの香りと味わいを楽しんでおられたり、おかわりしたりする方も出てきました。

瀬戸・赤津の喜多窯霞仙より加藤氏をお招きした折には、陶器の素材や製法、侘び寂びなどについてお話しいただき、赤津焼のお碗でお抹茶を楽しんでいただきました。職人の技が詰まった器に直接触れ、素材である土をも感じられるよい機会となりました。

習字

お習字は、もっと書きたい、練習したいという声が終了時刻間際まで聞かれる人気講座の一つでした。会の終了後に練習成果を見せにきてくれる方も多かったです。筆の持ち方や姿勢、心を静かな状態に保つことなど日常的な要

素も多く、さまざまに楽しんでもらえます。水彩画に親しむ方からは、筆に馴染みがあるからとても楽しいという声も聞かれました。また、書いているうちに日本語の文字に興味が出てくる方も多く、質問が絶えません。カラー筆ペンを使って絵やデザインを楽しむ姿も印象的でした。アメリカの子どもたちの色使いにはいつも驚かされます。色彩感覚は周囲の環境も大きく作用するのだらうなと思います。



ひな祭りイベントで日本の遊びに挑戦する子どもたち

他州でのイベント・ワークショップ

隣州の美術館で開かれたひな祭りのイベントは大盛況で、JOIブースでの折り紙で封筒を折る体験にもぎわいを見せました。ご祝儀などの習慣や、紙や布を使った包み方などに興味を持ってくださる方、日本の絵本の英語版をじっくり読み、感想を寄せてくださる方もおられました。

後日、ブースを訪れてくださった方から地元の小学校に招かれ、アニメクラブでおにぎり作りの体験会を開きました。日本のお米や和食について紹介し、枝豆スナックをお箸でつまむ練習やお味噌汁の試食をしました。中華料理店でお箸を使うという声も複数聞かれました。いつもと違うものを食べることから、異なる食風土や住・自然環境への興味も育まれていきそううれしく思います。



お箸で枝豆スナックをつまむ練習をする様子 (Edamame Champ、Table For Two主催)



早坂 武志

HAYASAKA Takeshi

JOI Yr. 20th
(2022年8月～2024年7月)

アイオワ州デモイン
アイオワ日米協会

前職では人材会社に勤務。海外事業部に所属し、外国人を採用したい企業のコンサルティング業務や留学生の就職支援を担当。新しいことにチャレンジして自分の可能性を広げたいという思いから、JOIプログラムに応募。

アイオワナイス

派遣前の研修で私の赴任先が「アイオワ州」と聞いた時は、正直どこなのかまったく分かりませんでした。聞き慣れない土地でこれから2年間生活するという期待と不安の両方を抱えて、渡米したのを今でも覚えています。

私の派遣先はアメリカ中西部に位置するアイオワ州の州都であるデモインに拠点を置く、アイオワ日米協会（JASI）でした。1989年に創設された非営利団体で、小規模の団体ですが、積極的に日本文化の紹介や日米の相互理解の促進を目的とした活動を行っていました。

1960年にアイオワ州は山梨県と姉妹州となり、日米で締結された姉妹県州の第1号です。コロナで2年遅れましたが、私がデモインに到着してから5日後に姉妹県州60周年を祝う交流が行われました。Iowa Sister States (ISS) という団体とともに、アイオワ日米協会としてスーパーバイザーたちと一緒に私も通訳やツアーガイドとして携わりました。また姉妹都市交流も活発に行われており、JOIの2年間の活動期間中に甲府市とデモイン市、甲州市とエムズ市の姉妹都市交流が行われ、Greater Des Moines Sister Cities CommissionやAmes International Partner Cities Association (AIPCA) と一緒にこちらも微力ながら関わらせてもらいました。

アイオワ日米協会には、州内外問わずさまざまな問い合わせや依頼が多く、2年間の活動期間中に上記の姉妹県州/都市交流のサポート、学校や図書館訪問、シニアセンター訪問、派遣先内外でのイベントの運営などを幅広く行いました。



学校訪問の様子

ここから特に私が印象に残った活動を2つご紹介します。

人口775人の町

2年間で派遣先のデモインエリアを中心に25か所以上の市町村を訪問し、アウトリーチ活



大学での風呂敷ワークショップの様子

動を行いました。中でも、最後に訪れたWest Bendという町の図書館で行ったプレゼンテーションはとても印象に残っています。私の滞在していたデモインから北西に車で200km以上の場所にあり、当日は大雨で視界が悪く、果たして参加者が集まるのかと疑問に思っていました。無事に図書館に到着し、プレゼンテーションが始まる5分前の時点で参加者は3名しかいませんでした。ところが、時間になると少しずつ人が増え始め、会場が満席になるほどになりました。プレゼンテーションでは、日本の紹介、折り紙、炭坑節を行いました。私が参加者に私の出身地の人口を紹介した際に、West Bendの人口が775人だということを知りました。大雨にもかかわらず子どもから大人まで25人以上の参加者が集まり、一瞬言葉に詰まってしまいました。日本に行ったことも、日本人に会ったこともない人がほとんどの中で、JOIプログラムを通して行った草の根活動の必要性が分かりました。プレゼンテーションが終わった後に参加者からたくさん質問があり、小学生くらいの女の子から「日本語を自分で勉強していて、もっと話せるになりたい」と言っていたのが印象に残っています。

約7万人が訪れるCelebrAsian (アジアフェスティバル)

毎年5月末に「CelebrAsian」というアジアンフェスティバルがデモインで開催されます。2日間で州内外から約7万人が訪れ、およそ15か国のアジアの国が参加し、アイオワ日米協会もジャパンビレッジとして毎年参加している大規模なイベントです。私はジャパンビレッジのサブリーダーとして、イベントの半年前くらいから準備を始めました。今年のジャパンビレッジのテーマをサムライと決め、ロサンゼルスで活動し



サムライグループとの写真

ているサムライグループに連絡を取り、快く返事をもらいました。ジャパンビレッジではサムライにちなんで、サムライランチャやサムライに関係するアニメグッズの販売、また、大きな紙で兜を作成するコーナーや、国際交流基金ニューヨーク日本文化センターからお借りした兜を展示しました。

2日間で60人以上のボランティアの方にジャパンビレッジを手伝っていただき、イベントを盛り上げることができました。このイベントのために、ボランティアを始め、国際交流基金ニューヨーク日本文化センター、在シカゴ日本国総領事館、協力企業や団体を含む、たくさんの方々にご支援いただきイベントを大成功させることができました。



帰国前の送別会の集合写真

この2年間の活動は自分1人の力ではできないのではなく、スーパーバイザーをはじめ、アイオワ日米協会のスタッフやボランティアの方たちのサポートのおかげで完了することができ、感謝でいっぱいです。

帰国の1週間前には私の送別会を企画していただき、たくさんのメッセージを頂きました。アイオワには「アイオワナイス」という言葉があり、2年間の活動でたくさんその言葉の意味を感じることがありました。JOIプログラムに参加できて本当に良かったです。



久富 淑恵

HISATOMI Yoshie

JOI Yr. 20th
(2022年8月～2024年7月)

カンザス州ローレンス
カンザス大学

13歳の時に米国でホームステイを経験。この体験が人生の転機となる。ボストンでの留学&就労経験を活かし、商社で海外営業、行政機関で通訳・翻訳業務に携わる。米国を舞台に日本と米国の架け橋として活躍したい想いからJOIプログラムに参加。

My Two-Year Journey in Kansas

コロナ禍と隣り合わせの生活が続く中、ようやくアメリカでコーディネーターとして挑戦できることを楽しみにして出発した2022年の夏を今でも鮮明に覚えています。カンザス州は「Sunflower State」と呼ばれており、夏になると青空の下に美しいヒマワリ畑が広がります。ヒマワリは州のシンボルであり、人々もその花のように明るくフレンドリーな方々が印象的でした。

派遣先のカンザス大学東アジア研究センターでは、派遣当初から帰国するまで、仕事面でもプライベート面でも家族のように可愛がっていただき、センターのスタッフとの出会いは私にとって宝物です。JOIコーディネーターとして、大学内のイベントや学校訪問（小学校から高校まで）、少年院訪問、姉妹都市交流、コミュニティ向けのクッキングクラス、教育者やビジネス向けのワークショップなど、幅広く活動できたと思います。

特に印象に残った活動を2つほどご紹介します。



ミズーリ州の小学校訪問（お箸を使ったゲーム前に持ち方の練習中）

少年院でのアウトリーチ

2年間で、合計6か月（約25回）にわたり少年院でアウトリーチ活動を行いました。この施設では、さまざまな罪を犯した10歳から17歳までの子どもたちが過ごしています。アウトリーチ活動を実施するために、バックグラウンドチェックとトレーニングを受け、ようやく少年院訪問の許可と権利を得ることができました。



大学から車で10分ほどの距離にある少年院

アウトリーチ活動を行う中で、特に大きな葛藤を抱えました。施設にいる子どもたちの多くは、元の社会に戻る事が難しく、18歳の誕生日を迎えると成人用の刑務所に移されることが多いと聞いていました。そのため、「社会に戻れず、広い世界を見ることもできず、日本に行く可能性も高くない子どもたち」に対して、日本文化の何を伝えるべきか、日本を発信する真の意味について深く考えさせられました。

その中で、私が心掛けたのは、日本文化を知ることで一瞬でも笑顔になり、楽しいと感じてもらえることでした。日本文化に込められた優しさや希望、愛の意味を探し出し、工夫を凝らしました。しかし、「今日はどれだけ子どもたちの心に残せたか」と悩むことも多かったです。それでも、毎週通ううちに子どもたちと打ち解け、帰り際に「Are you coming back next week?」と私の訪問を楽しみに待っていてくれることがとてもうれしかったです。また、施設で勤務している警察官や教師の方々からも、「あなたが来ている時だけ、こんなににぎやかな笑い声が聞こえてくるので、私たちもこの時間がとてもうれしい」とおっしゃってくださった言葉は、心に深く残っています。この写真は、唯一撮影が許可されたもので、貴重な思い出として大切にしています。



浴衣と法被の試着体験で大喜びな子どもたち

ローレンスと平塚市の姉妹都市交流

私が子どもの頃に体験した国際交流が現在の私に大きな影響を与えているため、この2年間にわたって子どもたちの異文化交流をサポートできたことは、非常に意味深いものでした。この姉妹都市交流は30年以上の歴史があり、毎年6月末にはローレンスの生徒が平塚を訪れ、その2週間後には平塚市の生徒がローレンスを訪れるという形で行われています。



出発前の送別会（ローレンスの子どもたちと引率）

JOIコーディネーターとして、私は派遣する子どもたちの面接や選抜、そして出発に向けた準備全般に関与しました。出発の約8か月前から始まる事前準備では、簡単なあいさつの仕方、お辞儀の方法、ホームステイ先でのマナー、テーブルマナー、レストランやお店での支払い方法などを、実践的なゲームを取り入れて指導しました。また、平塚市からの訪問時には、生徒の引率や通訳を担当しました。



お買い物ゲーム前にお金の数え方の練習

30年以上にわたるこの素晴らしい国際的な絆をさらに深め、より良い未来を築くために関わったことに、深い感謝の気持ちでいっぱいです。また、長年の夢であった日本とアメリカをつなぐ「架け橋」という役割を実感することができ、大変うれしく思っています。

最後に

その他にも、さまざまなアウトリーチの機会を頂き、草の根レベルでの交流を深めることができたと感じています。仕事面でもプライベート面でも充実した2年間を送ることができたのは、周りのの方々のサポートのおかげです。

JOIプログラムを通じて、プレゼンテーション能力、企画力、臨機応変な対応力、忍耐力など、さまざまなスキルを磨くことができました。これらの経験は、私の人生においてかけがえのないものであり、今後もアメリカと日本をつなぐ活動を続けるための大きな糧となると確信しています。この貴重な経験を活かし、引き続き両国の架け橋としての役割を果たしていきたいと考えています。



森 薫

MORI Kaoru

JOI Yr. 20th
(2022年8月～2024年7月)

モンタナ州ビルングス
モンタナ州立大学ビルングス



大学卒業後グランドスタッフとして国際便を担当。その後、米国ディズニーワールド日本館に就業するも新型コロナの影響を受け強制帰国。JOIプログラムへの参加は自身にとって米国と日本の架け橋になる2度目のチャンス。

モンタナに広がる和

私はモンタナ州最大の都市ビルングスにあるモンタナ州立大学ビルングスに派遣されました。1927年に創立された州立大学で、総生徒数は約4,000人と米国では比較的小規模な大学です。私は留学生のサポートや交換留学プログラムの運営を行うOffice of International Studies (以下OIS) に2年間所属しました。主に大学内では日本文化のイベントや、学生クラブ、日本人短期留学プログラムの運営、日本語指導を行い、学外では地域の学校、図書館、団体などを訪問して日本文化を紹介しました。



Japan Festivalにて牛深ハイヤ節披露

特に印象に残った活動は、Billings Japan Festivalです。これはOISが主催するGlobal Studies Seminarの目玉イベントとして行われました。Global Studies Seminarは、毎年どこかの国にフォーカスし、文化系のワークショップやレクチャーなどを秋学期の間、毎週行います。OISからコミュニティに異文化体験を届けるということがコンセプトです。昨年の秋学期は、Japan Themed Semesterと題して、日本をテーマに私がこのプログラムの運営を担当しました。今回私がこだわった点は、生の日本の伝統芸能をビルングスに届けることです。そこでモンタナ州の姉妹都市である熊本県に連絡を取りました。大変ありがたいことに熊本県観光課と天草市役所から支援を頂けることになり、熊本県牛深高校郷土芸能部15名がビルングスを訪問、伝統芸能である牛深ハイヤ節をJapan Festivalで披露するという夢のような企画を実現することができました。また天草市は天草産の鰯と鯛も寄付してくださり、現地の人々は新鮮な天草のお刺身を堪能しました。その他にも国際交流基金の助成金にて、カリフォルニア州から太鼓パフォーマーをお迎えしました。在シアトル日本国総領事館の文化チームも参加してくださり、合計15種類にも及ぶワークショップやブースを設けることができました。



牛深高校郷土芸能部が現地の高校生と交流

来場者は総勢600名にも及び、エリア最大の国際イベントとなりました。参加者からは、「いろんな日本の文化に触れることができて良かった。このようなイベントは初めてで、またぜひ開催してほしい!」といったたくさんのお褒めの言葉を頂き、大盛況となりました。



熊本県立大学生と書道を教える

JOIの大きなミッションの一つが、コーディネーターの派遣後も日本文化を普及し続けるサステナブルな活動を築くことです。私が取り組んだことの一つが、モンタナ州と熊本県の姉妹都市関係の強化です。30年以上も続く関係ですが、残念なことにこの周知度はまだまだ低く、この姉妹都市関係を強くすることが私の一つの目標でした。Japan Festivalでは熊本県をPRするブースや、姉妹都市関係を紹介するプレゼンテーションを行いました。また牛深高校の現地高校訪問も調整し、3校を訪問し、学生たちは英語で熊本県を紹介、牛深ハイヤを披露し、現地の高校生との交流を行いました。また私のオフィスは毎年冬に提携校の熊本県立大学から、1か月間の短期留学生を受け入れています。私は2年間この留学プログラムのコーディネーターを任せ、彼らのホストファミリーの募集、1か月間のスケジュール作成、引率、イベント運営などを行いました。私は彼らを現地の学校や

老人ホームに連れて行き、日本文化と一緒に紹介しました。これも熊本との姉妹都市関係を広める鍵となりました。

もう一つのサステナビリティへの取り組みは、私が学内で立ち上げたEast Asia Clubです。韓国人のインストラクターと協力し、日本・韓国の文化を学ぶための学生クラブを運営しました。1週間に1回ほど、日本と韓国のワークショップを交互に行いました。2023年度はクラブから2名、2024年度は3名が日本への長期留学を決め、現地の学生に大きなインパクトを与えることができました。現在の中心メンバーが卒業や留学に行くため来期のクラブ運営は困難ですが、日本留学から戻ってきた学生がクラブを引き継ぎ、日本文化を引き続き広めてくれます。



East Asia Clubにていちご大福を紹介

モンタナでの2年間は全てが順風満帆ではなく、大変なことや辛いこともたくさんありました。周りのサポートがあったからこそ成し遂げられ、強く成長できたと思います。JOIの活動を通して得た経験、出逢いは私にとって宝物です。このような機会を頂いたことに感謝しております。今後も何かの形で、日本とアメリカの架け橋になれるよう努めていきたいです。



山本 由梨子

YAMAMOTO Yuriko

JOI Yr. 20th
(2022年8月～2024年7月)

ケンタッキー州フランクフォート
ケンタッキー日米協会



途上国での障がい児・者支援をすることを夢見て、大学卒業後は、障がい児施設で勤務をする。応募した別のプログラムに合格できず、自分にできることを見つめ直している時にJOIプログラムのことを知り応募する。

「つながる」から「つなげる」へ

私はJOIコーディネーターとして、ケンタッキー日米協会に派遣されました。事務所は家から車で45分ほど離れた、州都のフランクフォート市にあります。基本的にはルイビル市で在宅勤務をしていました。ルイビル市は人口約62万人ほどの都市で、人口約5.8万人の私の生まれ故郷からすると大都会でした。1年目は、自分が地域の人々と「つながる」ことを意識して活動していました。そして、2年目は私のつながりを他と「つなげる」ことに力を入れていました。以下、持続可能な国際交流を実現するために私が行ってきたこと、印象に残ったことを書きます。

ボランティアグループの結成

JOIの活動に興味をもつ女の子との出会いをきっかけに、ボランティアグループを作りました。日本文化の紹介に興味があったり、日本語を勉強していたり、日本との間になんらかの背景をもっていたりする人々が集まりました。定期的にイベント情報をメールで送り、興味があれば手伝っていただく、という形で行いました。日本に興味のあるボランティアと地域の人々をつなげることができました。中でも私が一番うれしかったのは、地域の福祉施設でのボランティアに興味を持つ人々が何人もいたことです。メールで募集をかけると「ぜひやりたい!」という返信が何通も届きました。障がい児・者と地域をつなげることは、私がずっとやりたいことの1つでした。ボランティアの人々も、施設の利用者も、お互いにより出会いと交流ができたと思います。



私が日本へ帰国する前に開いた、ボランティアへの感謝を伝えるパーティー



福祉施設での絵手紙ワークショップ
ボランティアの方が日本の文字を教えているところ



ナッシュビル桜祭り2023でソーラン節を披露
このうち、5名は1週間ほど前に出場を決定しました



福祉施設でソーラン節ワークショップを行いました

よさこいグループの結成

2023年4月開催のナッシュビル桜祭りで、ソーラン節を披露することを目指し、同年1月よさこいグループを募集・結成しました。しかし、なかなか踊り子を集められず、桜祭りの1週間前まで6人ほどしかいませんでした。しかし、何名かの踊り子が彼らの友人や知り合いを集めてくれ、最終的には11人でソーラン節を披露することができました。人とのつながりに助けられる出来事でした。その後のチームでの披露は特に考えていませんでしたが、踊り子たちから「次はあのイベントで踊りたい!」「新しいダンスを教えてほしい!」という声があがりました。気が付けばグループ結成をしてからの1年半の間に計12回、ソーラン節や他のよさこいの踊り、盆踊りを披露してきました。イベントでの披露のみに留まらず、大学や福祉施設での踊りワークショップなども行い、地域に根差した活動もメンバーと行ってきました。メンバーのやる気が私の背中を押してくれたからこそ、一緒に走り抜けてこれました。彼らには感謝しかありません。私がケンタッキー州を去った後も、引き継いでいくことを決めてくれました。これからも、日本の祭りを通して、日本文化が地域で広がっていくことを願っています。



ナッシュビル桜祭り2024で再びソーラン節を披露しました
デネシー州に派遣された2名のJOIコーディネーターのチームとコラボし、約30名で踊りました

かけがえのない人々との出会い

私は2年間、ホストファミリーのお宅にホームステイをさせてもらいました。実家から離れて暮らす初めての経験でした。日本観光をしたことをきっかけに、日本人受け入れに興味を持ってくださったご家族でした。見ず知らずの私を一つ一つの家族行事に誘ってくれたり、誕生日やクリスマスと一緒に祝ってくれたり、家族の一員のように接してくれました。家庭内では気づいた人が家事をやっていました。洗濯物も一緒に洗っていて、私がホストファミリーの洗濯物を畳んだり、逆に畳んでもらったりもしました。食事も、それぞれ忙しくて揃わないこともありましたが、ホストファミリーが作ってくれたり、私が日本食を作って振る舞ったりすることもありました。身近なアメリカ文化を学ばせていただきました。ホストのお父さんもお母さんも互いに自分のビジネスを立ち上げており、働き者で趣味の多いご夫婦でした。そのような人々と生活させていただいて、とてもいい刺激になりました。スーパーバイザーとの年齢差は5歳で、他のコーディネーターと比べて一番年齢差のないペアでした。私と彼女の性格診断テストの結果はきれいに真逆でしたが、それがよかったのかお互いにない面を補いあって動くことができたと思います。生活面でも仕事面でも、お手本となる方で、彼女からは人との接し方や柔軟性、プロ意識など、本当に多くのことを学びました。そのような方と2年間働くことができて、幸運でした。そして、私のことを気にかけてくれた友人や教会の人々などとの出会いも、かけがえのない宝物です。

大学を卒業してから、日本で社会人となり、友人を作る機会はほとんどありませんでした。アメリカで地域に根差した活動を行う中で、たくさんの友だちができたことは、私の財産ですし、JOIの魅力の一つだと思います。私にとって、ケンタッキー州は、第二の故郷です。そう言い切ることができるのは、大切な人々がそこにいるからです。これからもつながっていたいと心の底から思います。



ケンタッキーダービーのイベントで撮ったスーパーバイザーとの一枚